老いの始まりの徴候の認知の性差・年齢差

大城 宜武*

Sex and Age Differences in the Cognitions of "Getting Old"

Yoshitake OSHIRO*

Eight hundred and two men and women of wide age range responded to a questionnaire concerning signs of being old.

Main results were as follows.

1) Physical health resources were most frequently cited (59.0%) as the signs of being old.

2) Significant sex differences were found in five out of the ten indices of being old. While women regarded the decline of physical resource and being granted a pension, men tended to view the retirement as initial signs of being old.

3) Significant age differences were found in eight out of ten indices. The middle age group viewed the declined of physical resources, young group viewed the receiving of a pension, and the old group viewed the failure of their memory, respectively as the incipient signs of being old.

4) Multivariate analysis of the ten incipient signs of being old by means of Hayashi's quantification theory type III yielded four groups. They were named, "role transfer along the life cycle", "being given an old age title", "physical decline and pension", and "loss of active interest".

Key words: cognition, incipient signs of being old, sex differences, age differences, Okinawa

認知, 老いの始まりの徴候, 性差, 年齢差, 沖縄

I 緒 言

高齢期はどのような時期であろうか, 高齢期はどのように認知されているのだろうか。

Pitt (1977) は「老人とは, 年をとるとともに進行する機能と作業の衰えである」と述べ, また, 「老化とは衰退の時期である」として老年で味わう

7つの喪失を列挙している。すなわち, 地位, 収入, 健康, 仲間, 自立, 居住設備, 生命, である。

守屋・長谷川 (1979) は「老年期はいろいろな面で衰退ならびに喪失が目立ってくる時期である。老年期が一般に衰退期として特徴づけられる所以である」と述べ, 井上 (1988) は, 長谷川・賀集 (1977) によりつつ「老年期になると, 人は

* 沖縄キリスト教短期大学・総合教育系

* General Education, Okinawa Christian Junior College

多かれ少なかれ、あるいは遅かれ早かれ大きく4つ失うものがある」とし、4つの喪失について列挙している。すなわち、①心身の健康の喪失、②経済的基盤の喪失、③社会的つながりの喪失、④生きる目的の喪失、である。ここで重要な事は、4つの喪失にみまわれることでなく、「生きる意味の喪失」感であり、「生きる意味の喪失」感こそまさに老年期を特徴づける事実である、と主張している。

田中ら(1981)は「老人問題は、おおまかに疾病(健康と疾病の問題)、孤独(心理の問題)、貧困(経済の問題)の3つであるといわれている」と述べている。藍澤ら(1991)は「従来から指摘されてきた健康、経済、人間関係の3つの要因が、老年期の適応を左右する」としている。

新福(1994)は、「一般的には、老いは人を悲しみや苦しみに陥れることが多いので、医学や医療の進歩によって寿命が伸び、老人が多くなればなるほど、悲しみや悩みに陥るものが多くなることを予想しなければならない」と述べ、老年期における知能の衰え、人格面の変化、社会的適応性の変化、生産性の低下を、挙げている。

Ward(1977)は、老いる事への否定的なステレオタイプをGoffman(1963)によりつつ、スティグマ(Stigma)と呼び、それが自己侮蔑感と強く関連する、と主張している。

袖井(1975)は、包括的に老年期開始の理論的検討を行っているが、発達論的アプローチによる老年期をつぎのように整理している。

老年期とは、加齢に伴う精神的肉体的能力の衰退、労働市場における商品としての価値の喪失、あるいは家族の周期段階の変化の結果、職業活動や親としての役割から引退をし、やがておとずれる死に対して準備する時期である。

以上のように、高齢期および高齢者とは、「喪失」と関連づけられている事が明らかである。老いは喪失であると、見做される。いろいろな喪失があるが、その喪失の始まりは老いの徴候として認知されるであろう。どの喪失、したがって何が特に老いの始まりの徴候と見做されるのか。

本稿の目的は、老いの始まりの徴候の認知に関し、性差と年齢差についての知見を得る事である。

II 対象と方法

1. 対象

沖縄県の本島北部の過疎地域、同中部の新興近郊都市、同宮古地区の離島漁村地域の老年人、中年者、若年者を調査対象とした。ここで、老年者とは65歳以上の成人、中年者とは25歳以上65歳未満の成人、若年者とは高校生である。標本は各地域の、老年者については同人口の4%(448人)、中年者については1%(519人)を無作為に抽出した。回収率は87.8%である。若年者については各地域に所在する高校2年生から、無作為に学級単位で都市地区は4クラス、それ以外は各2クラス抽出した(合計333人)。回収率は100.0%である。欠損値のあるケースを除き、本稿の分析で用いたのは802人である。性・年齢の内訳を表1に掲げる。

2. 調査の実施

調査は1990年10月から12月にかけて実施した。中年者・老年者については質問紙の留置法によった。若年者は授業時間内で一斉調査をした。

3. 調査項目

「高齢期における世代関係」を捉えるためにデモグラフィック関連項目を含む全47設問項目よりなるアンケートを用意した。ただし若年用、中年用、老年用により設問数には若干の異同がある。このうち、本稿では各年齢層共通の「老いの始まりの徴候」に関する設問に限って分析を施す。(調査の詳細については新垣ら1993を参照されたい)。

調査項目の妥当性と信頼性について付言しておく。

まず、調査項目の妥当性について述べる。本研究で採用した老いの始まりの徴候に関する項目

表1 調査対象内訳

年 齢	男 性	女 性	小 計
若 年	134	180	314
中 年	141	163	304
老 年	80	104	184
小 計	355	447	802

表2 老いの始まりの徴候の認知

問1 あなたにとって「老人」とは、どういう時を境として始まるとお考えですか、次の中から2つ選んで下さい。

老いの徴候項目	実数	%
1) 仕事を止めたり、仕事思うようにできなくなったとき	227	28.3
2) 年をとって家事がおっくうになったとき	68	8.5
3) 年をとって身体がきかなくなったとき	473	59.0
4) もの忘れが多くなったとき	170	21.2
5) 配偶者と死別したとき	15	1.9
6) 子供が結婚して独立したとき	36	4.5
7) 孫ができたとき	96	12.0
8) 人から「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれたとき	137	17.1
9) ゲートボール等に誘われるようになったとき	36	4.5
10) 年金が生活費を支えるようになったとき	281	35.0
11) その他	7	0.9

は、内閣総理大臣官房老人対策室(1982)、を参考に「その他」を含む全11個を設定した(表2を参照の事)。これらの項目は、老年期に生じる喪失、または新しい取得役割を示している。これらの内、仕事を止める、年金が生活費を支える、の各項目は、職業からの引退、それに伴う経済的基盤の喪失要因である。家事おっくう、身体が自由きかない、もの忘れ多い、は心身機能の衰退、配偶者と死別、子供独立、孫誕生は、家族周期段階の変化の要因である。ゲートボールに誘われる、おじいちゃんと呼ばれる、は老人に対するステレオタイプにもとづいた老人像の項目である。

表現方法は異なるものの、これらの項目は、内閣総理大臣官房広報室(1993)にも引き続き採用され、調査項目としては一般的であると考えられる。

なお、本研究で採用した項目には、社会的つながり、生きる目的等と関連した老いの始まりの徴候や内容や人生の統合の意識などの項目は含まれていない。その点では老いの始まりの徴候を十全にカバーしているとはいいがたい。しかしながら、表2に見られるように、「その他」を選択した者の比率が1%未満であるのは、消極的ながらここで用意した項目が老いの始まりの徴候をほぼ押えていることの証左なのかもしれない。

つぎに、信頼性について述べる。本研究の基と

なった調査は一回切りのものであり、したがってテスト・リテスト法での信頼性の検討はできない。また、各項目の選択比率を問題にしているの、通常の検査得点を基にした折半法も適用できない。そこで、調査対象に一連番号を付し、奇数群と偶数群に分け、それぞれの群内での各項目ごとの選択比率をもとに正規化標準点を求めた。これによって両群の偏差積率相関を求め、これをもって信頼度係数とした。結果は、 $r = .974$ ($df = 8$, $p = .000$)となった。十分信頼性を備えていると見做せよう。

4. データの処理

データの統計的処理は、まず、性と年齢を一括して各老いの徴候項目に対する応答を調べた。ついで老いの徴候項目ごとに χ^2 検定によって性差、年齢差を調べた。この時、性と年齢を一括した場合と、年齢または性の影響を除外した場合のそれぞれについて検定を施した。いずれも統計解析ライブラリーSASのFREQプロシージャーを用いた。

また、老いの徴候の認知の有無を目的変数、性と年齢を説明変数とするロジスティック回帰分析をSASのCATMODプロシージャーによって施した。この方法によって各老いの徴候の認知に対する性と世代の交互作用の検出を企図した。次に、林の数量化第Ⅲ類によって、老いの徴候項目の分

類を試みた。統計分析は富士通の統計解析ライブラリーANALYSTを用いた。ついで数量化後のサンプルスコアを基にして、性、年齢、および性と年齢の交互作用、のモデルによる分散分析を施した。この分析にはSASのGLMプロシーチャーを用いた。演算は九州大学大型計算機センターの統計解析ライブラリーを利用し、一部PC-SASも使用した。

本稿では、地域要因の絡んだ分析は一切施していない。

III 結 果

1. 老いの始まりの徴候の認知-全体的傾向

老いの始まりの徴候（以下、老いの徴候、と略記する）として、「その他」を含む11項目を用意し、その中から2つ選択させた結果が表2に掲げてある。それによると、「年をとって身体がきかなくなるとき」が59%の者に「老いの始まりの

徴候」として認知されている事が示されている。この項目のみが50%を越えて選択された。ついで「年金が生活費を支えるようになったとき」35%、「仕事を止めたり、仕事が思うようにできなくなったとき」28.3%、「もの忘れが多くなったとき」21.2%となっている。以上が選択率20%以上の項目である。

2. 老いの始まりの徴候の認知の性差

老いの徴候ごとにその項目の選択率の性差について χ^2 値、一般連関のCMH統計量を表3に掲げた。 χ^2 検定の結果が有意であることは、性と老いの徴候項目が連関していること、すなわち性の違いによって老いの徴候項目の選択率に違いのある事を意味している。一般連関のCMH統計量は、老いの徴候項目の選択率を若年、中年、老年の年齢によって認整した後の、性と老いの徴候項目の連関を示している。なお、項目「その他」は度数が小さいので以下の統計的分析から除外した。

表3 老いの始まりの徴候に関する認知の性差

老いの徴候項目	上欄：実数 下欄：%		χ^2 値	CMH 統計量 ^a
	男	女		
1) 仕事を止めたり、仕事が思うようにできなくなったとき	123 34.7	104 23.3	12.076**	12.436**
2) 年をとって家事がおっくうになったとき	22 6.2	46 10.3	3.762 ^b	4.422*
3) 年をとって身体がきかなくなるとき	196 55.2	277 62.0	3.460 ^b	4.367*
4) もの忘れが多くなったとき	71 20.0	99 22.2	0.425 ^{n.s.}	0.608 ^{n.s.}
5) 配偶者と死別したとき	8 2.3	7 1.6	0.204 ^{n.s.}	0.593 ^{n.s.}
6) 子供が結婚して独立したとき	18 5.1	18 4.0	0.289 ^{n.s.}	0.588 ^{n.s.}
7) 孫ができたとき	45 12.7	51 11.4	0.193 ^{n.s.}	0.656 ^{n.s.}
8) 人から「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれたとき	71 20.0	66 14.8	3.467 ^b	4.479*
9) ゲートボール等に誘われるようになったとき	17 4.8	19 4.3	0.038 ^{n.s.}	0.167 ^{n.s.}
10) 年金が生活費を支えるようになったとき	111 31.3	170 38.0	3.685 ^b	4.118*
11) その他	4 1.1	3 0.7		

^aCochran-Mantel-Haenszel の一般連関の統計量

^b.05 < p < .10

*p < .05 **p < .01 ^{n.s.}not significant

表4 老いの始まりの徴候に関する認知の年齢差

老いの徴候項目				上欄：実数	CMH 統計量 ^a
	若年	中年	老年	下欄：%	
					N=802
1) 仕事を止めたり，仕事が思うようにできなくなったとき	70 22.3	91 29.9	66 35.9	11.179**	11.039**
2) 年をとって家事がおっくうになったとき	16 5.1	26 8.6	26 14.1	12.208**	12.286**
3) 年をとって身体がきかなくなったとき	163 51.9	206 67.8	104 56.5	16.639**	17.227**
4) もの忘れが多くなったとき	48 15.3	66 21.7	56 30.4	16.015**	16.025**
5) 配偶者と死別したとき	5 1.6	2 0.7	8 4.4	8.721*	8.782*
6) 子供が結婚して独立したとき	18 5.7	9 3.0	9 4.9	2.859 ^{n.s.}	2.934 ^{n.s.}
7) 孫ができたとき	76 24.2	12 3.9	8 4.3	73.313**	73.487**
8) 人から「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれたとき	81 25.8	37 12.2	19 10.3	27.939**	28.557**
9) ゲートボール等に誘われるようになったとき	20 6.4	11 3.6	5 2.7	4.474 ^{n.s.}	4.501 ^{n.s.}
10) 年金が生活費を支えるようになったとき	117 37.3	115 37.8	49 26.2	7.437*	7.571*
11) その他	5 1.6	2 0.2	0 0.0		

^aCochran-Mantel-Haenszel の一般連関の統計量*p<.05 **p<.01 ^{n.s.}not significant

有意に男性の選択率が高い老いの徴候は「仕事を止めたり，仕事が思うようにできなくなった」と「人からおじいちゃん，おばあちゃんと呼ばれるようになったとき」である。有意に女性の選択率が高いのは「年をとって家事がおっくうになったとき」，「年をとって身体がきかなくなったとき」，「年金が生活費を支えるようになったとき」である。

3. 老いの始まりの徴候の認知の年齢差

老いの始まりの徴候の認知の年齢差，つまり老いの徴候と年齢の連関の有意性について， χ^2 検定と一般連関の CMH 統計量の結果は一致し，10項目中8項目において有意となっている（表4 参照のこと）。以下有意となった項目についてその特徴を列挙する。

世代が上がるにつれて，選択率が漸増する老いの徴候は，「仕事を止めたり，仕事が思うようにできなくなったとき」，「年をとって家事がおっくうになったとき」，「もの忘れが多くなったとき」の

3項目である。

世代が上がるにつれて，選択率が漸減する老いの徴候は，人からおじいちゃんおばあちゃんと呼ばれるとき」の1項目のみである。

若年，中年，老年におけるそれぞれの選択率が逆V型になっているのは，「年をとって身体がきかなくなったとき」と「年金が生活費を支えるようになったとき」の2項目である。

また，V字型になっているのは，「配偶者と死別したとき」と「孫ができたとき」の2項目である。

「子供が結婚して独立したとき」と「ゲートボールに誘われるようになったとき」の2項目は年齢との有意な連関がなかった。

4. 性と年齢を説明要因とするロジスティック回帰分析

最初，次のように性と年齢の交互作用を含むモデルで分析を行った。

老いの徴候＝性＋年齢＋性×年齢

その結果，どの老いの徴候項目についても最尤度

法による適合度の検定では当てはまりが良くなかった。つまり、交互作用を含むモデルはこのデータの分析には適しないということである。そこで、交互作用の項を外した次のモデル、すなわち主効果モデルによる分析を施した。

老いの徴候＝性＋年齢

最尤度法による検定の結果、このモデルは適合する事が明らかになった。

各々の老いの徴候項目ごとのロジスティック回帰分析では、先述の性差の分析および年齢差の分析結果と同じであった、つまり性の主効果、年齢の主効果の有意性について表3および表4に掲げる結果を確認するものであった（表は省略した）。

5. 老いの徴候項目のパターン分類

老いの徴候10項目の選択・非選択を基に、数量化第III類によるパターン分類の分析を施した。第3解まで求めた（カテゴリーウエイト表は省略した）。

解1：この解にプラスの高いカテゴリー・ウエイトを示す項目は、「孫ができた」「子供の独立」「配偶者との死別」など、家族周期と関連が深い。マイナスのウエイトでは「身体がきかない」「もの忘れが多い」など、健康と関連が深い。「家族周期－健康」軸であろう。

解2：プラスの高いカテゴリー・ウエイトを示す項目は「子供が独立」「配偶者と死別」「家事が

図1 老いの始まりの徴候項目の布置 (解1×解2)

図2 解1 サンプルスコアの性別・年齢別平均値

おっくう」などで「孤独」性で特徴づけられる。マイナスの高いカテゴリー・ウェイトを示す項目は「年金」である。「孤独一年金」の軸であろう。

解3：プラスの高いカテゴリー・ウェイトを示す項目は「もの忘れ」「ゲートボールに誘われる」などである。マイナスの高いカテゴリー・ウェイトを示す項目は「仕事を止めた」などである。「もの忘れー引退」の軸であろう。

これら3つの解を軸とする3次元空間を想定し、8分割されたそれぞれの空間のいずれかにカテゴリー・ウェイトでもって老いの徴候項目を位置づけたところ8分割されたそれぞれの空間に布置したのは各1項目程である。これではパターン分類する意味がほとんどない。そこで、解1と解2のカテゴリー・ウェイトを用いて、老いの徴候項目の布置を示した(図1参照)。図によると、第1象限は「配偶者死別」「子供独立」「孫誕生」で家族周期のパラダイム・シフトと読み取ることができる。第2象限は、「おじいちゃん、またはおばあちゃん、とよばれる」いわば他律的な老人性のラベリングである。第3象限は、「身体が自由がきかない」の健康要因と、「年金が生活費の支え」の経済的な要因を表す。第4象限は、「家事がおっくう」「もの忘れ多い」「仕事を止める」など、意欲の減退と関係している。

6. 解1のサンプル・スコアの分析

表5 解1のサンプルスコアのGLMによる分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	P
性	3.086	1	3.086	3.39	0.0658
年齢	72.182	2	36.091	39.69	0.0001
性・年齢	6.265	2	3.132	3.44	0.0320
残差	723.891	796	0.969		

解1のサンプル・スコアを従属変数とするGLMの結果を表5に掲げた。解1は「家族周期ー健康」の軸である。

年齢の主効果と、性と年齢の交互作用が有意となっている。性の主効果は有意でない。年齢別、性別にサンプルスコアの平均値を図2に掲げた。年齢差について概観すると、若年群の場合は家族周期的な側面で老いの徴候を認め、中年以降は健康的側面で老いの徴候を認知している。

年齢群ごとに男女間の比較を行うと、若年群では男性が女性より家族周期要因で老いの認知をし、性差は有意である。中年群と老年群では性差は有意でない。次に、性別に年齢群間比較を行う。男性においては、若年と中年、若年と老年間には有意差があり、中年と老年間には有意差がない。女性においても、若年と中年、若年と老年の間には有意差があるが、中年と老年の間には有意差が認められない(多重比較の表は省略した)。以上を

図3 解2 サンプルスコアの性別・年齢別平均値

表6 解2のサンプルスコアのGLMによる分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	P
性	1.681	1	1.681	1.75	0.1858
年齢	23.583	2	36.091	39.69	0.0001
性・年齢	11.645	2	3.132	3.44	0.0024
残差	763.103	796	0.969		

まとめると、若年群は老いの徴候を家族周期の側面で捉え、かつその傾向は男性において顕著である。中年以降では男女とも老いの徴候を健康の側面で捉えているという結果である。

7. 解2のサンプル・スコア分析

解2のサンプルスコアを従属変数とするGLMの結果を表6に掲げた。解2は「孤独—年金」の軸である。

年齢の主効果と、性と年齢の交互作用が有意であり、性の主効果は有意となっていない。年齢群別、性別にサンプルスコアの平均値を図3に掲げた

年齢群ごとに男女間比較すると、若年群では男性は孤独を女性年金を老いの徴候として認知し、その性差は有意である。中年および老年群では性差は有意でない。次に、性別に年齢群間の比較を行う。男性の場合、若年と中年、若年と老年の間には有意差はなく、中年群と老年群間に有意

差が認められた。中年群は年金の方向に、老年群は孤独の方向に老いの徴候を認めている。女性の場合は年齢が進むにつれて、年金から孤独の方へほぼ直線的に変化している。そして全ての年齢間で有意差が認められる（多重比較表は省略した）。

なお、解3のサンプルスコアを従属変数とするGLMの結果、性の主効果のみが有意となり ($F=6.85, p<0.009$)、年齢の主効果および性と年齢の交互作用は有意でなかった（分析表は省略）。男性は引退、女性はもの忘れとして老いの徴候を認める方向にある。

IV 考 察

老いの始まりの徴候項目として用意された11個の選択肢（「その他」を含む）から2つあて選ばせて、老いの始まりの徴候の認知の性差、年齢差を捉えようと試みた。分析に使用したサンプル数は802人である。

全データを一括すると、老いの始まりの徴候は、まず「年をとって身体がきかなくなったとき」（59%）として認知されている。身体機能の低下による老いの始まりの徴候である。古谷野ら（1993）は、「健康は老人の生活の態様を規定し、幸福な老い（Successful aging）の可否を決定する最大の要因である」と述べ、高齢者の生活機能の自立性について報告している。予想されるように、

加齢に伴って活動能力は低下していた。ADL（日常生活動作能力）研究によると、加齢に伴いADLが低下すること、ADLの低下と生命予後には強い関連があることが報告されている（橋本ら1986、藤田1989、藤田・波多野1990、など）。しかし、ADLが向上する例のある事も報告されている（安田ら1989）。この項目を老いの始まりの徴候と認知するのは女性において敏感である（オッズ比は1.355）。

ある一定年齢を過ぎると、加齢に伴って身体の不自由がきかない状態は漸増するもののように考えられる。しかし、年齢間比較によると比率の高さは、若・中・老の年齢群間で逆V字型を示している。つまり、身体の不自由がきかないことで老いの始まりを認知するのは、老年群ではなくて中年群である。中年群の年齢区分を、中年初期（25～34歳）、中期（35～49歳）、後期（50～64歳）と整理し直して χ^2 検定したところ、年齢間の変動は有意でなかった（ $\chi^2=0.201$, $df=2$, $p<0.904$ ）。すなわち、どの年齢段階にあらうが高い比率で選択され、年齢間差がない。ということは、すでに20代から、身体の不自由のきかないことを、老いの始まりの徴候として認知し始めていることが窺える。また、老年群についてもさらに細かく年齢区分して年齢間差を調べたが、この場合も有意でなく、老年群のどの年齢でもほぼ同様の選択率である。

ついで、選択率の高い項目は「年金が生活費を支えるようになったとき」（35%）である。経済的基盤の変化すなわち収入源の年金への転換が挙げられている。ただし、年金の問題は経済的な側面を持つのは言を俟たないが、一方、いわば年金の受給年齢として暦年齢に基づく法制度上の社会的老齢規定的な側面も見落としてはならないだろう。年金が生活費を支えるとは、年金生活者になることである。つまり、職業生活から引退し、隠居になることであろう。そのような機会に遭遇するのは男性に多いはずである。しかし、年金受給で老いの始まりの徴候と考えるのは女性に多い。この結果は「高齢期の生活イメージに関する世論調査」（内閣総理大臣官房広報室、1993）とも一致している。女性は老齢年金受給年齢に達する事で

老いを制度的に公認され、年金生活者の地位を獲得することになる。老いの公認がすなわち老いの始まりの徴候を表すということである。年齢で見ると、年金が老いの始まりの徴候と認知する者の比率は、若年群と中年群でほぼ同じで、老年群より高い。いわば法制度上の区分によって老いの始まりが決定され、その決定を追認するのが若年・中年群であり、年金受給当事者である老年群にはあまり受け入れられていない。老年群には、年金よりも主要な老いの始まりの徴候と思わしめる事柄がある、ということであろう。

「仕事を止めたり、仕事が思うようにできなくなったとき」（28.3%）というのは、職業からの引退ないし心身機能の低下による仕事の継続の困難さを示している。いずれにしても生産性からの撤退である。そして、それに伴う経済的基盤の喪失も意味する。これを老いの始まりの徴候とするのは男性に多い（オッズ比は1.794）。一般的に、男性は就職し経済的基盤を作ることが期待され、やがて職業から引退する。したがって、この性差の存在については妥当な結果であろう。また、年齢が高くなるにつれて、この項目を老いの始まりの徴候と認知する比率が漸増するのは、しだいに、この事実が個別的・具体的に把握されるようになることを意味するのであろう。

このように、健康の喪失、経済的基盤の喪失、あるいは退職が老いの始まりのドミナントな徴候として認知されている。これらに対して、家族周期段階の変化に関連した項目については老いの始まりの徴候として認知される度合いは低い。この結果は「老後の生活についてのイメージ」調査の結果と軌を一にしているようである。すなわち老後とは、日本人の場合「健康が衰えた後の生活」「年金生活者としての生活」、「仕事から引退した生活」としてイメージされている（内閣総理大臣官房老人対策室、1982）。ただし、このイメージは60歳以上の高齢者におけるものであり、若年、中年は含まれていない。

山下（1973）は「老人という問題意識は、単に暦の上の年齢からではなくて、身体的・精神的な

衰えに起因するものである。就労の困難さも、家庭や社会への不適應も、そこに端を発している。老人問題の中で保健の役割の重く大きいことを主張するゆえんである」と述べている。本稿との関連で言えば、身体的・精神的衰えには「身体が自由がきかない」「もの忘れが多い」の2項目が含まれる事になろう。すなわち、心身の機能の衰退により、「仕事が思うようにできなくなった」り、「家事がおっくう」になったのである、と解釈できよう。本研究では、しかしながら保健行動や、健康維持増進活動に関する項目を調査していないので、より深い分析は残されたままである。

2. 老いの徴候の類型と性・年齢の関連

図1に老いの始まりの徴候項目のパターン分類の結果を示した。第1～4象限を老いの始まりの徴候類型と見做して、それぞれの象限の解釈を試みる。

第1象限は、子供の結婚、孫の誕生、配偶者と死別の徴候に代表される家族周期の段階の移行で

特徴づけられる。「家族周期の変化」型と呼ぼう(以下、家族周期、と略記する)。

第2象限は、おじいちゃんまたはおばあちゃんと呼ばれるというものであり、「老人標識」型と解釈できる。

第3象限は、横軸(解2)に対して「年金が生活費を支える」と縦軸(解1)に対して「年をとって身体が自由に動かない」という健康喪失の2つの徴候で特徴づけられる。「健康喪失と年金」型である(以下、健康喪失、と略記する)

第4象限は「家事がおっくう」「もの忘れが多い」「仕事を止めたり、仕事が思うようにできない」といった「意欲喪失」型、と解釈される。

老いの始まりの徴候の類型と性、年齢の関連を見るためにサンプルスコアの平均値によって性別・年齢群別の布置を図4に示した。男性は年齢群別に見ると若年群は「家族周期」型、中年群は「健康喪失」型、老年群は「意欲喪失」型に布置している。女性の若年群は「老人標識」型、中年群

図4 老いの始まりの徴候の類型と性・年齢

表7 老いの始まりの徴候類型の人数内訳

徴候類型	若年	中年	老年	男性	女性	合計
家族周期	89	31	43	87	76	163
老人標識	66	65	26	61	96	157
健康喪失	66	137	89	127	165	292
意欲喪失	93	71	26	80	110	190

は「意欲喪失」型と「健康喪失」型の境界，老年群は「意欲喪失」型に布置している。老年群では性差はなく，男女共に「意欲喪失」を老いの始まりの徴候と見做している。

老いの始まりの各類型の，年齢群別，性別の人数の内訳を表7に掲げた。「健康喪失」型に属する者がもっとも多く，「老人標識」型に属する者がもっとも少ない。 χ^2 検定の結果は有意である($\chi^2=58.708$, $df=3$, $p<.001$)。身体の衰え，年金の受給が老いの始まりの徴候として認知されることが多い。生物学的老化要因，社会的要因が両様に老いの始まりの徴候として同時に把握されている事が示唆される。

性と類型については，連関の傾向が認められる($\chi^2=7.776$, $df=3$, $p=.051$)。男女とも「健康喪失」型がドミナントである。

年齢と型の連関を検討すると，これは有意である($\chi^2=74.453$, $df=6$, $p<.001$)。若年群は「意欲喪失」型と「家族周期」型，中年群と老年群は「健康喪失」型が多い。全般的には中年群の「健康喪失」型がもっとも多く，そろそろ老いを知覚し始め，身体的徴候としては体力の衰え，経済的次元としては経済的自立の喪失，他者への依存を余儀なくされる「老いの受容」の備えが必要とされる時期であろう。老年群での「老人標識」型と「意欲喪失」型がもっとも少ない。このように老いの始まりの徴候の認知には年齢間差がある。

本稿は，「老いは喪失である」との視点から老いの始まりの徴候の認知を検討した。しかしながら「老年期は，衰退期とも円熟期ともいわれてきたが，これまでの老年期に関する心理学的研究は主に衰退的变化を実証することにむけられてきたくらいがあった」(下仲，1994)とする主張もある。

本研究は円熟の側面からの老いの始まりの認知を検討していない。この点については，残された課題である。

V 結 論

何をもって，老いの始まりの徴候と見做すのか，若年・中年，老年者の男女802人について，その性差，年齢間差を中心に検討した。

1) 老いの始まりの徴候として，「年をとって身体が自由がきかなくなった」を老いの始まりとする者が59%で最も多い，ついで「年金が生活費を支える」(35%)，「仕事を止めたり，仕事が思うようにできなくなった」(28%)となっている。

2) 男性は女性より「仕事を止めたり，仕事が思うようにできない」ことで老いの始まりの徴候とする率が高い。

3) 女性は男性より「年をとって身体が自由がきかなくなった」，「年金が生活費を支える」ことで老いの始まりの徴候とする率が高い。

4) 「年をとって身体が自由がきかなくなった」とする老いの始まりの徴候項目は年齢と有意な連関があり，若年者，中年者，老年者の選択比率はそれぞれ52%，68%，57%である。

5) 「仕事を止めたり，仕事が思うようにできない」とする老いの始まりの徴候は，年齢があがるにしたがってその選択比率が漸増する。

6) 「年金が生活費を支える」とする老いの始まりの徴候認知は，若い世代ほど高い。

7) 若い世代ほど「ひとから，おじいちゃん，おばあちゃん，と呼ばれる」ことで老いの始まりの徴候とする比率が高い。

8) 数量化第Ⅲ類によって，老いの始まりの徴候10項目は「健康喪失と年金」「意欲喪失」「家族周期の変化」「老人標識」とパターン分類された。

9) 「健康喪失と年金」を老いの始まりの徴候とするものがもっとも多く，「老人標識」を老いの始まりの徴候とするものはもっとも少ない。

10) 男性の若年者は「家族周期の変化」要因，中年者は「健康喪失と年金」要因，老年者は「意欲喪失」要因を老いの始まりの徴候としている。

11) 女性の若年者は「老人標識」要因, 中年者・老年者は「意欲喪失」要因を老いの始まりの徴候としている。

〔附記〕

1. 本研究のデータは, 平成2～3年度科学研究費補助金(研究代表者・新垣都代子, 琉球大学教育学部教授)によるプロジェクトで得られたものです。調査にご協力下さいました皆様にお礼申し上げます。

2. 本研究をまとめるにあたり, 豊川裕之先生(東邦大学医学部教授)にご指導を賜りました。ここに記して深甚の謝意を表します。

文 献

- 藍澤鎮雄, 田久保栄治, 中沢治彦, 他 (1991): 老年期と不安感, 臨床精神医学, 20(1), 13-20
- アンダーソン, S. 他(重松逸造, 柳川 洋, 監訳)1982, 疫学・臨床医学における比較研究の統計学, ソフトサイエンス社(東京) Anderson, S. & Others (1980): Statistic a Methods for Comparative Studies. John Wiley & Sons Inc.
- 荒井保夫(1988): 高齢者の心の健康, 老年社会科学, 10(2), 139-158
- 藤田利治 (1989): 地域老人の日常生活動作能力低下の生命予後への影響, 日本公衛誌, 36(10), 717-729
- 藤田利治, 笹野脩一 (1990): 地域老人の生命予後関連要因についての3地域追跡研究, 日本公衛誌, 37(1), 1-8
- 芳賀 博, 柴田 博, 上野満雄, 他 (1991): 地域老人における健康自己評価からみた生命予後, 日本公衛誌, 38(10), 783-789
- 長谷川和夫, 賀集竹子, 編著 (1977): 老人心理へのアプローチ, 医学書院 (東京)
- 橋本修二, 岡本和士, 前田 清, 他 (1986): 地域高齢者の生命予後に影響する日常生活上の諸因子についての検討, 日本公衛誌, 33(12), 741-747
- 井上勝也(1988): 老年期と生きがい, 老年社会科学, 10(2), 243-254
- 厚生統計協会 (1992): 国民衛生の動向(厚生指標, 臨時増刊, 39(9))
- 古谷野亘, 橋本廸生, 府川哲夫, 柴田 博, 郡司篤晃 (1993): 地域老人の生活機能, 日本公衛誌, 40(6), 468-473
- 松崎俊久 (1984): 戦後日本人の寿命の伸びとその背景, 松崎俊久 編著, 寿命, 7-46, 女子栄養大学出版部 (東京)
- 守屋国光, 長谷川恒雄 (1979): 心身機能の連関性からみた老年期の衰退過程, 社会老年学, 10, 63-78
- 内閣総理大臣官房老人対策室, 編 (1982): 老人の生活と意識, 大蔵省印刷局 (東京)
- 内閣総理大臣官房広報室, 編 (1993): 高齢期の生活イメージに関する世論調査, 大蔵省印刷局 (東京)
- 新垣都代子, 玉城隆雄, 大城宜武, 花城梨枝子(1993) 沖縄の高齢者をめぐる世代関係, 多賀出版 (東京)
- 小川 裕, 岩崎 清, 安村誠司 (1993): 地域高齢者の健康評価に関する追跡的研究, 日本公衛誌, 40(9), 859-871
- 沖縄県環境保健部(1992): 平成2年衛生統計年報(人口動態編), 沖縄県
- 沖縄県企画開発部 (1992): 沖縄県の人口(平成2年国勢調査), 沖縄県
- ビット, B. 木戸又三, 訳(1977): 精神老年医学入門, 文光堂, (東京) Pitt, B. (1974): Psychogeriatrics, An Introduction to the Psychiatry of Old Age, Churchill Livingstone, (Edinburgh)
- SAS User's Guide (1990): Statistics. Version 5 Edition. SAS ソフトウェア株式会社 (東京)
- 柴田 博 (1993): 人口高齢化の論理, 柴田 博, 芳賀 博, 長田久雄, 古谷野亘 (編著), 老年学入門, 11-20, 川島書店 (東京)
- 柴田 博, 古谷野亘, 芳賀 博(1983): ADL 研究の最近の動向, 社会老年学, 21, 70-83
- 清水 信 (1984): 老人の心理生活, 老年精神医学, 1(1), 54-62
- 下方浩史 (1991): 老化の指標, 国際長寿科学シンポジウム実行委員会事務局 (編) '90国際長寿科学シンポジウム, 362-367, (名古屋)
- 下仲順子 (1994): 老年期は衰退の時期か, 日本心理学会58回大会発表論文集, S59
- 新福尚武(1994): Successful Aging, 心身医, 34(1), 20-26
- 袖井孝子 (1975): 老年期の社会学的規定, 社会老年学, 2, 43-53
- 高橋久美子 (1989): 老年期における配偶喪失, 日本家政学会誌, 40(7), 575-585
- 田中平三, 政田喜代子, 馬場昭美, 他 (1981): 老人の社会的適応に関する精神衛生学的研究, 日本公衛誌, 28(2), 59-68
- 内山道明, 吉村智恵子 (1991): 高齢者の心理特性, 祖父江逸郎(編), 高齢者の生活と長寿科学, 136-143, 長寿科学振興財団 (東京)
- Ward, R.A. (1977): The impact of subjective age and stigma on older persons. Journal of Gerontology, 32(2), 227-232
- World Health Organization (1984): The use of epidemiology in the study of the elderly. (WHO Technical Report Series 706)

山下 章(1973)： 老人保健，日本公衛誌，20(6)，293
-297

安田誠史，三野善央，久繁哲徳，大原啓志，豊田 誠，
大平昌彦(1989)： 地域在宅高齢者の日常生活動作

能力の低下に関連する生活様式，日本公衛誌，36(9)，
675-681

依田 浩(1985)： 四訂生活の統計学，光生館(東京)
(受稿 至急 1994.9.21；受理 1994.12.9)